

「心理学主義化」する新新宗教の教説 — GLA を事例に

渡邊 典子

立教大学大学院社会学研究科

要旨

1970年代の日本の新新宗教ブームを牽引したGLA(God Light Association)総合本部の二代目の教祖高橋佳子は会員に「ミカエル」¹と信じられており、会員にカウンセリング的なふりかえり(「神理」という教えの実践)技法やスピリチュアルなターミナルケア²を提供している。現代のGLA会員の活動からは、個人化・グローバル化社会で競争を強いられている人々や、感情労働³を求められるサービス業の人々に支持されるようなスピリチュアルな「心の技法」が見出せる。

この「心の技法」へのニーズにより、刺激反応図式の古典的パラダイムの主体が刺激に反応する受動的な存在であったことに対し、現代の主体とは、自己の行動をコントロールする能動的な存在であることを示し、そこに至る心身管理の自己責任性の重視を考察する。

そして、GLAの神観、初代教祖高橋信次や弟子らのチャネリング⁴、瞑想や座禅などの「心の技法」を題材に、後期資本主義時代の新新宗教の教説の「心理主義化」傾向を分析する

キーワード

心の技法、新新宗教、カウンセリング、自己責任、心理主義化

1. 問題の所在

新新宗教は、1970年代以降の宗教変容の代表的存在であったが、その時代は、カウンセリングがさらに台頭してきた時代でもあった。

社会学者森真一によれば、近年、就職活動をする大学生の課題は「自己分析」であり、バブル終焉後の企業が望む人物像の変化から、自己分析の必要性が高まったという。心理学的知識や心理学主義的視点・価値観を身に付ける人が増えるこ

とを心理学化という⁵。

精神科医斎藤環は社会の「心理学化」とは、社会の諸現象や心理が心理学の言葉で記述されてゆく傾向であるという⁶。斎藤の考察する心理学ブームとは、アメリカの20世紀中頃のハリウッド映画の「心理学的テーマ」の流行や「アダルト・チルドレン」「癒し」「被害者学」「心の闇」「トラウマ」⁷「PTSD」⁸などの言葉の流行のことである⁹。1995年、教育現場でも「不登校」・「いじめ」・「学級崩壊」などの問題が注目され、スクールカウンセリングの学校への導入¹⁰に至る。

社会学者小池靖は、2002年の文部科学省による公立学校への『心のノート』配布や「脳内トレーニング」のゲームなどの流行を挙げ、それはその学知によるばかりか、自己の内的生活を向上させたいという動機の面では「心理主義」の人気と地続きであるという¹¹。

このように21世紀の日本は「心理主義化する社会」であり、カウンセリング／セラピー文化が流行し、国家や教育者を始め、一般の人々も、この文化を科学的・医学的な「心や自己の内的生活を向上させるための技法」と考える傾向がみられる。日本のカウンセリングでは、精神分析療法や行動分析療法に加えて、アメリカの人間性・心理学のカール・ロジャースによる自己理論が使われていることが多い。ロジャース出現以降には近代キリスト教の一元支配に対抗し、東洋の禅や瞑想を「心の技法」として発見するニューエイジ運動も起き¹²、また、1970年代、日本においては新新宗教ブームが起きている。

日本の新新宗教ブームの先駆的な役割を果たしたのはGLA(God Light Association)総合本部(1969年、大宇宙神光会という宗教法人として設立。後に現名称に改名。以後、GLAと略す)である。GLAは信者数1万7609人であり、全国に8ヶ所の本部と5ヶ所の研修センターをもつという¹³。信者数は2006年の時点で2万6千人という説もある¹⁴。

GLAの2代目教祖高橋佳子(1956年に誕生。初代教祖高橋信次の長女。以後、佳子と記す)は信者向け映像の中で呪術や物質化現象(身体から出た汗を金に変える)を見せている。

教団の活動の中心は「高橋佳子講演会」であり、佳子が教えを会員に講義をし、「神理(教え)実践報告」を行う。GLAの「神理実践」とは、「行」の実践である1種のカウンセリング的ふりかえり技法により、会員が過去を再解釈し、新しい物語から、自己実現をすることを指す。また、「神理実践報告を紐解く」¹⁵ことは、会員の過去のトラウマから、新しい物語による自己実現へと至るプロセスを佳子が神秘的な霊能力により言い当ることや、このプロセスを佳子が会員を励ましながら一緒に辿ることである。「神理実践報告」とは、佳子が会員にカウンセリング技法で「癒す」ことと解釈できる。また、映像から佳子のスピリチュアルなター

ミナルケアにも似たメッセージがある。

1970年代の新新宗教ブームとは、オカルト¹⁶などの流行や「精神世界」¹⁷の神秘、呪術ブームとともに、「非合理の復権」現象であると解釈できるが、GLAの禪定・瞑想（GLAでは、祈りの言葉の後の瞑目や黙想という）・カウンセリング的ふりかえり技法などの「行」もこれら同時代の文化流行と近似している。これら、「心の管理をする技」をここでは「心の技法」と呼ぶことにする。

以上のことを題材にして、1970年代以降のグローバル化、情報化、消費社会と個人化を論じ、ライフスタイルへの関心や後期近代の自己の再帰性についても言及したい。

また、初代教祖高橋信次の神観を考察し、信次の弟子の神秘的なチャネリングという「心の技法」を観察し、信次の教義とセラピー文化の関係にも言及したい。更に、他の新新宗教教団の例を挙げ、「心理主義化」を明らかにしたい。

GLAの参与観察と聞き取りによる調査は2008年11月から2010年5月23日まで行った。場所は都内のGLA総合本部、K支部、郊外のH支部、山梨県GLAの八ヶ岳「こころの里」の教団の宿泊施設や大ホールなどである。聞き取りに応じてくれた人々の年齢は20代後半から86才であり、男性2名、女性21名であった。

また、参与観察の事例である「神理実践報告」の調査は2010年5月22日のGLA「2010フロンティアカレッジ・こころの看護学校合同セミナー」で行い、会場は「こころの里」大ホールである。この模様は8本部へ中継されていた。セミナーの参加人数は、会員によれば21日は約1600名（スタッフは160名）が参加し、22日の午前中には2000名分のシートが満席であったという¹⁸。会誌では約2800名の参加者があったと書かれている。また、会員からの聞き取りによる調査は宿泊の同室の30代から50代の女性14名に行われた。職業別にみれば、介護ヘルパー、会社員、元看護師、専業主婦、元介護認定士、音楽教師などであった。

2. 新新宗教としてのGLA

1970年代の日本の宗教復興とは、NHKの世論調査の分析からも明らかなように、1973年ごろ以降、宗教へ回帰する現象を指し、この時代に新しく台頭してきた日本の新宗教は「新新宗教」と呼ばれている¹⁹。

宗教学者島蘭進によれば、70年代・80年代、「新新宗教」教団には、真光（世界真光文明教団、後に崇教真光などに分かれる）、GLA、阿含宗、イエスの方舟などがあり、外来の運動としては、統一教会（世界基督教統一神霊協会）、ハレ・クリシュナ（クリシュナ意識国際協会）、ラジニーシ（ラジニーシ瞑想センター）などの運動があった²⁰。

宗教学者西山茂の定義した新新宗教とは①大胆に神秘や呪術を行い、②様々な要素を結びつけてシンクレティックな創造をし、③1970年代の初頭以降に台頭した、④全国規模の教団、という特徴をもつという²¹。

新新宗教ブームの時代においては大衆文化でも呪術＝宗教的テーマが流行した。映画「エクソシスト」(1974年)やユリ・ゲラーの「スプーン曲げ」が注目され、また、欧米の「ニューエイジ」が日本では「精神世界」²²と呼ばれ、都市の書店の「精神世界の本」のコーナーもでき、S・マクレーン『アウト・オン・ア・リム』やC. ユングやトランスパーソナル心理学やシャーマニズムや気功や東洋思想、ケルト、古神道、アニミズム、占星術、瞑想法やヨーガや霊的成長、輪廻転生、「臨死体験」などの1980年代以降の流行へ続くものである²³。

そして、いわゆる「精神世界」とは、自らの意識を高いレベルに変容させ、「宇宙意識」や「大いなる自己」に合一を目指し、人類が新たな意識に目覚め、高次の人類への進化の過程を歩むと考える個人主義的な現象のことであり、島薺はこれらの動きをグローバルな現象として「新霊性運動」と呼んだ²⁴。西山は1970年代のこれらのブーム全体を指し、「非合理の復権」現象と呼んでいる²⁵。

「ニューエイジ」はアメリカの1960年代の対抗文化にその背景がある。ベトナム反戦運動のワシントンの集会(25万人集まった)やウッドストック・ロック・フェスティバル(1969年)など、アメリカの保守主流文化に対抗する新しい価値の構築であったという。それは近代資本主義や環境問題の危機から、病んでいる西欧近代文明の一元的支配を相対化する試みであり、禅、ヨーガ、チベット仏教、スーフィズムやアメリカ先住民思想の影響が見られるという²⁶。日本の70年代は「情報化」「エネルギーの危機」「脱工業化時代の到来」になり²⁷、教育、保健、公共サービスの社会部門の発達、医師数の増大、健康器具製造や運動施設経営の繁栄²⁸があり、家父長制中心の家族像が崩壊²⁹し、個人化と消費化により、生活の質を問う「柔らかい個人主義」が誕生したとされる³⁰。それらは、個人の生活の質やライフスタイルへの拘りであり、私的生活に適合的なベラーのいう「表現的個人主義」のあらわれであろう³¹。

これら先進国の流行こそ、グローバル化、情報化、個人化、消費社会化を示し、人々は「豊かな社会」で呪術・神秘の情報や商品化により、「精神世界」の領域に接近し易くなった。欧米人のヨーガ・瞑想・セラピーなどの心身技法の流行は、日本人のライフスタイルや社会の「心理主義化」にも関連し、相互に影響し合ってきたと考えられる。

社会学者アンソニー・ギデンズは、後期近代の時代の多種のセラピーの発展について、個人がモダニティの共同体や伝統の枠組みから離され、伝統的な場に存在した心理的支えを失い、孤独であるという見方とは別の見方を示している。セ

ラピーとは新たな不安に対する手段ではなく、自己の再帰性の表れであるという³²。

また、社会学者檜村愛子によれば、ギデンズがいう「再帰的な自己」とは、ベラーの「表現的個人主義」のように、仕事ですら自己実現の道具とみなすことであり、そうした発想を「再帰的個人主義」という³³。

1970年代に台頭した日本の新新宗教は神秘主義や呪術を駆使した全国規模の教団である。GLAはスピリチュアリズムの影響もあり、宇宙と人類の進化や輪廻転生も説くが、それは一種の自己責任の教義となり、「心身の管理」の技法の禪定や瞑想やカウンセリング的ふりかえり技法も「行」となる。GLAと他の新新宗教の関連をみてみよう。社会学者沼田健哉によれば、幸福の科学主宰大川隆法(本名、中川隆)の父、善川三郎(本名、中川三郎)は高橋信次の講演に感銘を受け、また、大川自身も24才の冬、佳子の『真・創世期』『地獄編』や同『天上編』を読み、その後信次の『心の発見』との出会いを転機にしたという³⁴。大川は「心の操縦法」(4に詳細に記す)を説き、幸福の科学もGLA同様にその教説から、「心理主義化」を窺うことができる。

次に現代のGLAの会員のカウンセリング的ふりかえり技法の実践から、個人化が進行した現代の自己実現の様子を観察し、分析し、考察したい。

3. GLAにおけるカウンセリング観

GLAの活動とは「四聖日の集い」といい、「新年の集い」、「善友の集い」(釈迦の誕生日4月8日がGLA創立記念日)、「現身の集い」(6月25日、信次が亡くなった日)、感謝の集い(大いなる存在・神へ感謝)である。その他には、新年祈りの集い(12月31日から1月1日、総合本部聖堂等)、高橋佳子先生ご生誕の集い(10月24日)、高橋佳子講演会(例年7月頃から11月頃に各地で開催)、また、各支部による「生活実践」(5~6人のグループでの学び)や「グローバル・ジェネシスプロジェクト研鑽」(研鑽と奉仕が一体になった実践的な学び)と伝道研鑽部会もある³⁵。

年齢層別の研鑽の場は、「チャレンジング・エンジェルズ」(小学校3年生から高校生の男女)のかけ橋セミナー、「青年塾」(高校生から30才未満の男女)の青年塾セミナー、「フロンティアカレッジ」(30才から59才の男性)と「こころの看護学校」(30才から59才の女性)の「フロンティアカレッジ・こころの看護学校合同セミナー」、「豊心大学」(60才以上の男女)、豊心大学セミナーである。専門分野別の研鑽の場は、TL(トータルライフ)人間学セミナー(年1回)であり、経営・医療・教育などの専門別のセミナー(年3回)である³⁶。

GLAの活動の中心は「高橋佳子の講演会」であり、教義の講義と、佳子と選

ばれた会員とで行われる「神理実践報告」がある。GLAでは、これらを「魂の学」(人間の生まれてきた理由とは過去世の願いの使命を果たすこと)の実践であり、「行」という³⁷。GLAのカウンセリング的ふりかえり技法の「行」は2種あり、「ウイズダム」と「止観行」である。「ウイズダム」は問題解決と創造のメソッドであり、内なる心を転換させるものである。また、「止観行」は気づかなかった瞬時の心をモニタリングするものである。

会員がマニュアルに従って、専門のシートに記入することをGLAでは「行」の実践という³⁸。「止観シート」への記入の仕方は、初めに「基本行に取り組む私の願い」のシートに年月日・氏名を記入する。次に、①「願い」を立てる。②高橋佳子の心(佳子の心を感じながら行う)に触れ、「本心」(願いと悔い)を思い出す。次に、困難と感じる出来事を《出来事》→《感じ、受けとめ、考え、行為》→《出来事に出て来たつぶやき》→《どこでちょっと待てよ(自分の心を客観的に見つめること)をかけますか(自分の「心」のクセを知るため)》。③佳子著書の「祈り」の言葉(佳子は「本心」に感応する力をもつ)を記入。④「祈り」から、佳子の霊能力で浄化されてゆく。また、「ウイズダム」(願ったら叶う。思考が現実に影響を与える)の記入例は、①達成したい「自己の望み」と「現状」(現状を構成する「いつもの心と人間関係と結果」)を記録する。②変革の試みとは、「いつもの心と人間関係」の変革し、「自己の望み」を実現するために、佳子の「祈りの言葉」と霊能力を加えて、いつもの現実を変革させる。③最後にアクションプログラムにおいて、新たな目標を立て、日々、達成できたかできなかったかを記入してゆくのである。

このセミナーの「神理実践報告」の事例は、会員がカウンセリング的ふりかえり技法の「行」から、幼い頃から抱えていた苦しみのトラウマの原因を、「魂の願いの使命」と会員が再解釈し、新たな物語により、自己の再構築に挑戦し、驚くように成功したと語る物語が多い。

そして、舞台の上で報告する報告者に佳子が会員のトラウマの原因を霊視力で言い当て、そのプロセスを辿ることを「神理実践報告を紐解く」(トラウマの過去をスピリチュアルに再解釈する。毎回、1名か2名の事例。1時間から約2時間)という。それは会員の苦しみの過去から、会員の自己実現に至るプロセスを佳子が会員を励ましながらか一緒に辿ることである。その時、佳子は会員にカウンセラーとして、会員の話を「再確認」し、会員の「感情を明確化」している。そこにはカウンセリングの要素もあり、これはスピリチュアル・カウンセリングの一種と考えられる。

会員は「行」の結果報告と共に佳子から、スピリチュアルなカウンセリングの「癒し」を受けるのである。

筆者は2008年11月から2010年5月23日まで、本部の職員、古くからの会員、H支部、K支部、セミナー参加者など約25名と話をした。筆者に話を聞かせてくれた人びとは佳子とプロジェクトの予算など話す機会も多いという。しかし、その人達の中に佳子の神理実践の報告者の経験をもつ人はいなかった。

これらのことにより、報告者になる人は人が羨むような稀な世俗的な成功者である場合が多く、それはGLAのセラピー技法の「効果があった」と人が憧れる事例のようである。一般の会員はこれらの事例をお手本にして、「試練」を「魂の呼びかけ」と再解釈する方法を学ぶのである。支部では、映像による佳子の教えの講義や様々な会員の事例を学び、支部長などの指導により、「止観行」や「ウイズダム」のシートの書き方を練習し、事例について話し合いもする。今回、筆者が参加したセミナーの目的は佳子の講演と「ウイズダム」の学びである。

参加者の中には介護ヘルパーといった感情労働者の人やGLAのTL(トータルライフという経営・医療・教育などの専門家で構成される研鑽グループ)人間学に属する教師・介護士・看護師・医者などの人もいた。これらの人の仕事においては高度な自己の感情コントロールが求められているのであろう。

このセミナーの中心である佳子の講演会の「神理実践報告」を考察したい。午前9時から、医師2名により、ストレッチの指導の後、午前中(10時から12時過ぎまで)、講演会は始まった。舞台の上で会員の「神理実践報告」として、佳子がスピリチュアル・カウンセリングにより、会員といっしょに苦悩の過去を再解釈する。このセミナーでは午後にも都内大手精密機器メーカーの部長の福田昌久さんの例もあった³⁹。

この日、「神理実践報告」の報告者はS氏(大学教授兼、精神科医)であり、6年間にわたり、「ウイズダム」「止観行」も行っていった。初めに佳子により、S氏が子供の頃、年上の子供と野球で遊び、S氏がバッターボックスに立つと、慕っていた友達が「早く片づけてしまおう」と友達にいうのを聞き、S氏はその時のショックが消えなかったということを説明される。また、S氏により、子供の頃より、ずっと、死に対する恐怖を持ち続けている精神的苦悩を背負っていたことを明かされる。S氏はその苦悩により、精神的に苦しむ人に寄り添おうと精神科医を目指したという。

また、佳子はS氏にこれらの事柄を優しく語りかけ、確認してゆくのであるが、佳子がS氏の「語られる言葉の再陳述」する時、S氏は「その通りです。先生」と佳子に向けて何度かいうのである。

S氏は佳子の「魂の学」の「試練は呼びかけ」という教えに会ったことにより、「私の中にあった魂の中にあつた恐怖心という心の声を聞く」という。このS氏の言葉が教えの何にあたるか考えてみれば、それは「意識の源」を遡ったこと

に相当する。例えば、佳子の教えとは、アトランティス⁴⁰に象徴される内なる感覚を探り、「意識の源へ遡れ」「自他の境界を超えよ」「見えないものを見よ」「つながりに目覚めよ」というものである⁴¹。

更にS氏は話を続ける。S氏が子供の頃、朝には元気だった母が夕暮れに毛布に包まれタンカーに乗り、死体となり、還ってきたという。

S氏の話为佳子は「そうだったわね。○○ちゃん」と「受容」し、「朝、元気だったお母さんが、夕暮れになると毛布に包まれ死体となって帰ってきたのね」と「語られる言葉の再陳述」し、その時の会員の感情を「怖かったのね」と「明確化」する。この時、佳子はまるで姉が弟を慰めているように会員の顔を覗きこみ、共感的で肯定的な身振り、表情をもって話しかける。するとS氏は肯き、その恐怖や悲しみを思い出したのか、泣きじゃくり出した。

S氏のケースにおいては、母の突然の死や友達の言葉により、感受性の強いS氏は生の不安定さや死へ畏怖、また、他者への不信を感じるようになった。S氏はその自己の苦しみの経験より、苦しむ人を救いたいと精神科の医師となり、任務に励む。

S氏は時々、しゃくりあげるように泣きながら、会場の人々に向けて以下のようにセラピーの効果を語りかける。「いつも死の恐怖心で四苦八苦していた自分が佳子先生の教えを学ぶ6年間で、『人は変われる』— 私が私の仕事を通して、『人は変われる』ことを教育学部に行って学生に伝えたい」。

S氏は今年、4月に希望であった教育学部への移動を果たしたが、それは、前の臨床の立場を兼ね、障害者を支援する教育者を育てる現場に行き、「私の願い— 魂の願いを伝えたい」という願いからであった。

聴衆の会員らはGLAの「行」や教祖の霊能力により、報告者が幼い頃のトラウマや悲しみから解放され、社会的成功を修めていることを知り、夢をかなえる「ウイズダム」「止観行」を日々の「行」として励むのであろう。

宿泊した部屋の会員の中には、社会的成功を夢みて「ウイズダム」の課題に夜明けまで取り組む人もいた。

これらの事例の会員は経営者や大手の企業の管理職が多く、この事例から、グローバル化の競争の激化が観察できる。世界中を飛び回り、激しい駆け引きを行い、リストラされるおそれのある仕事は、“いつも・どこでも”自分の感情の管理を求められている。社会学者森真一によれば、心理主義社会を形成する我々は、高度な自己コントロールの要請に応え、努力をしているのだという⁴²。

数名の会員によれば、佳子に命じられた「ウイズダム」という方法により「行」の千枚修行をした、英語教材の販売で名を馳せた経営者は、自社のCMに有名なゴルファーを起用できたという。

セミナーで上映された映像において、佳子が会員の末期癌患者を病院に見舞うという事例があった。患者は譫妄状態で意識不明に見えるが、佳子の解釈によれば、「魂があこの世とこの世を自在に行き来している」との事であり、患者の長女の会員は病室で「私は金粉が降ってくるのをみた」という。これがGLAのターミナル・ケア(映像により、年に2名位の事例を幾度か上映する)である。

こうしたGLAの実践とはロジャースの自己理論⁴³のように、会員が主体的に自己を語り、自己の洞察を深め、問題のありかを発見し、自ら解決していく。ここでは佳子がカウンセラーの役割をし、会員の「内容を再陳述」し、会員の「感情の明確化」により、会員は問題を全体の状況から離して、自分の内面の問題として捉え直すのである⁴⁴。すでに会員はカウンセリング的ふりかえり技法を行い、「自分の試練」を「魂の呼びかけ」と教えの上で再解釈し、新しい物語から、自己の望む自己実現を果している。まるで、それはロジャースのカウンセリングの非指示技法⁴⁵であり、会員が自身で自己の「使命」を探し、自己の望む自己実現という「成長」を目指すのだ。もちろんそこには、組織としてのGLAの布教・教化意図も……。

セッションの最後に「〇〇ちゃんの使命は、人の精神的な苦悩に寄り添うことでしたね」と会員の方を向き、尋ねる。会員が「肯く」のを見届けてから、佳子は会場の会員達に会員の「使命」を明かし、会場からは大きな拍手が起きる。

社会学者渋谷望によれば、社会心理学において、主体とは、外世界の刺激を受動的に受けるものと考えられてきたが、1960年代になると、主体が刺激を能動的に解釈する自己像へと転換され、主体が外的刺激を「解釈」する能力をもち、個人がストレッサーとしての能力を問われるようになるという⁴⁶。

社会学者森真一によれば、現代人は人格崇拜が進み、「傷つけられる」ことへ過敏な感受性があり、トラウマと共に生きるのは前の時代以上に困難になっているという。そして、この事例のように現代社会の自己コントロールの在り様が高度となる理由に「人格崇拜」⁴⁷・「合理化=マクドナルド化」の高度化・厳格化を挙げている。現代の「合理化=マクドナルド化」とは、生活まで効率性や予測可能性のコントロールが及ぶということである⁴⁸。このようにカウンセリングやセラピーとはトラウマを癒し、効率よく自己を管理する技術なのであろう。

ギデンズによれば、セラピーとは社会から自律的に生きる個人が、自己(身・心)を意識的に構築する行為であり、自己に誠実さという一貫性が求められ、トラウマ的な過去も自己実現のために再解釈され、利用され、自己成長することもあるプロセスであるという⁴⁹。これはGLAの「魂の学」の実践が、「苦しみから、生きる使命を見つける」と過去を再解釈する=自己実現・自己成長プロジェクト=であり、「人生史」(「行」の1つ)の構築である。

次に GLA の初代教祖高橋信次の神観、弟子のチャネリング体験を観察し、信次や他の新新宗教の教えの分析から、「心理主義化」を考察してみたい。

4. 心理学化する新新宗教

1986年7月3日に信次(コンピューターの端末機器製造の高電工業株式会社社長())に霊的現象が起き、古代エジプトや中国の指導霊や守護霊とチャネリングが可能となったという⁵⁰。信次は心霊科学に興味をもち、小田秀人の主催の「菊花会」の会員でもあった⁵¹。

GLA の神観とは、神とは大宇宙大神霊であり、信次は神のもとにあるエル・ランティー(霊太陽=太陽のようなエネルギーの塊。真のメシア。アラーの別名)だということ。エル・ランティーの宇宙界の下に如来界があり、光の分霊であるイエス・釈迦・モーゼがそこに位置し、如来界と宇宙界を繋ぐのは大天使ミカエルという光の直系であり、佳子は自己をその大天使ミカエルと位置づけたという⁵²。

信次の教義にはスピリチュアリズムの影響⁵³が見られ、GLA では、アトランティス文明の時代、人類は進化し、霊視力があつたという⁵⁴。信次に起きた霊的現象は人智学のルドルフ・シュタイナーのアーカーシャ年代記⁵⁵ の概念に類似しており、輪廻転生を以下のように語る。「仏縁者の多くには、己の過去世、つまりその時代の正法の神理は刻み込まれて残っている。それは己の意識をひもとくことによって思い出すことができる事実だからである。輪廻転生は、お伽噺ではなく、誰の意識にも記録されている。— その扉を開くことのできるのは、神でも仏でもない己自身なのだ」⁵⁶。

佳子によれば、人間が誕生時に忘却している魂の故郷を思い出す体験は「ユニバース体験」という⁵⁷。

GLA は、現世から離脱や現世外の霊的世界での生に高い価値を置く傾向がある⁵⁸。草創期の GLA の一般会員の神秘体験の事例を元 GLA 西日本部長の園頭広周から、観察したい。

1987年、元会員(1978年に GLA を退会)の園頭は米国での布教のためにロサンジェルスニューエイジ系のアガシャ教会を訪問し、チャネラーのサルバットが有名なチャネラーのゼナーを降霊する降霊会に参加する⁵⁹。この訪問の年(1987)、園頭は国際正法協会(1978年、正法会として設立。1987年、国際正法協会に改名)を設立する。国際正法協会はニューエイジ運動のように人種差別や国境もなくなり、宗教は一つの神理に統合され、人間はすべて神の子だと説いた⁶⁰。

社会学者芳賀学によれば、70年代の神秘主義の流行は、オカルトそのものへの興味や変身の欲望、「本当の自分」になる願望によるものであるという⁶¹。

また、新新宗教の中には現世主義ではなく、前世、来世を通して、存続する自

分の魂に責任をもつという考え方があるという。その場合、輪廻転生とカルマの法則が強調される⁶²。「己の心は、無限の生命に通じている己自身の王国である。— 神仏は自ら信じ、努力する行為によってのみ力が与えられるのである」⁶³。

更に現世の生まれや両親とその環境についても以下のように語る。「地位、名誉、金、とさまざまな物をもっている両親を選ぶのも、貧乏人を選ぶのも、自分自身がすべて定めて生誕してきたことであり、現象界では、その中で自分の心を浄化に努力して行くべきこれもまた定めであり、努力の修積が大切なのである」⁶⁴。

島蘭の主張によれば、GLA や幸福の科学やオウム真理教における新新宗教の中の輪廻転生の思想の明確化は、自立や自己責任の意識の強化と深い関係があるという⁶⁵。

社会学者渋谷望によれば、ネオリベリズムにおいて、「福祉国家」を国家主義、集産主義に脱構築させて⁶⁶、規律訓練の主体から、自己とは自己の行動をコントロールする能動的な存在となったが、それは人間の身体へのリスク管理可能な主体の創出へのシフトであったという⁶⁷。

これらの論からすれば GLA の瞑想や禅やセラピーなどの「心の技法」の取り組みとは、「社会の心理主義化」の時代の自己よる自己の「心・身体」の管理や自己責任の強化と結び付いていると考えられる。

島蘭によれば、新新宗教では一般社会の日常生活のなかで、対他倫理的な「心なおし」の実践が弱まるが、中間型の幸福の科学や GLA (個人参加型に近い) では新しい傾向が見られるという⁶⁸。その傾向とは、「心のコントロール」について語り、「心の技法」を奨励する「心理主義化」の傾向といえる。

新新宗教の幸福の科学は、「心の操縦法」について以下のように語る。「私はこの優れた人生観はなにかといえば、それは卓越した心の操縦法であると、そのように言えると思うのです」⁶⁹。島蘭はこれを、心なおしの心理技術化⁷⁰ という。このように新新宗教の教説の「心理主義化」傾向が GLA においても観察できる。

5. グローバル化と宗教の変容

1960年代から、70年代にかけて、情報化、グローバル化、消費社会という「豊かな社会」の到来により、これらオカルトや身体技法による「心の技法」など、文化流行は日本にも伝播した。

1970年代の日本の新新宗教ブームの現象にみられる新しい傾向とは「心なおしの心理技術化」⁷¹であり、そこでは「旧」新宗教と異なり、例えば、新新宗教の GLA 総合本部は「カウンセリング的ふりかえり技法を行」として奨めている。このようなセラピーとはギデンズ(1991)のいう後期近代における自己の再帰的プロジェクトという自己の構築であり、セラピーのテクニクにより、「意識的に

自己をモニタリング」して、「自己実現」を目指す。それは苦悩する人に対して「救い」や「癒し」となるのであろう。しかし、ベラーの指摘によればセラピーとは人的資源の活用的手段であり、その特徴とは功利性であり、ベラーのいう「表現的個人主義」においては、もはや仕事ですら、「自己実現」をする道具であるという⁷²。

更にベラーから、GLAの推し進めるセラピーの根底を考察すれば、実業家である初代高橋信次の構築した教義に功利性に見合うものがあると考えられる。それは島藺の指摘にある輪廻転生の思想の明確化であり、一種の自己責任論と考えられ、後期資本主義の時代に親和的なものとも考えられる。後期近代の時代、近代の規律訓練の主体から、「ポスト規律訓練」の時代になり、自己が自己の行動をコントロールする能動的な存在へシフトした⁷³。

GLAの事例により、新新宗教の教説の「心理主義化」を観察すれば、後期近代において、人々はポスト伝統的秩序により、自己の再帰的プロジェクトを構築する能力を持ち、グローバル化、情報化の中、自己の選択した「心身の管理」の教説や技法を携えて「自己実現、自己成長のプロジェクト」の実現に向かう様相が窺える。この時代が人々に「心身管理」を要請するため、人々は「心理主義化する教説」を希求すると考えられる。

註

- ¹ 1975年、高橋信次は自らの予言の死の前の48才のクリスマスの時、「佳子だったのです。銀色の翼をもった天使が現れた」という。それ以来、会員は佳子が人類の救済者、大天使ミカエルであると信じているという(2009年6月25日の「現身の集い」をフィールドワークした記録から)。
- ² 樫尾直樹, 2010, 『スピリチュアリティ革命 — 現代霊性文化と開かれた宗教の可能性』春秋社。ターミナル・ケアとは、末期の癌患者などに精神的な平安を与えようとする医療・介護・終末期医療のことである。樫尾によれば、「スピリチュアルケア」ともいい、キリスト教系では「ホスピス」ともいう。仏教的ホスピスは「ビハーラ」といい、ビハーラ運動に基づく超宗派的な仏教ホスピスもある。140-143頁を参照。
- ³ Arlie Hochschild, 1983, *The Managed Heart: Commercialization of Human Feeling*, The University of California. (=2000, 石川准訳『管理される心 — 感情が商品になるとき』世界思想社。)によれば、「感情労働(emotional labor)」という用語を公的に観察可能な表情と身体的表現を作るために行う感情の管理という意味で用いる。感情労働と賃金とは引き替えられに売られ、〈交換価値〉を有するという。
- ⁴ Jon Klimo, 1987, *Channeling*, (=1991, プラブダ訳『チャネリングII — リアリティを創る』ヴォイス)によれば、チャネリングとは人に他の人格がのりうつるとその人たちが他の

人格からのメッセージを受け取る現象を指す。乗り移られる人は、「ミディアム(霊媒)」、または「チャネラー」と呼ばれる。

- ⁵ 森真一, 2000, 『自己コントロールの檻 — 感情マネジメント社会の現実』講談社. 26-31 頁を参照。
- ⁶ 斎藤環, 2009, 『心理学化する社会 — 癒したいのは「トラウマ」か「脳」か』河出書房新社. 9-60 頁を参照。
- ⁷ 社会学者、精神科医の斎藤環は「トラウマ」の語源はギリシャ語であり、外科学などで肉体の損傷を意味する言葉が、後に心的な外傷を意味する使い方になったという。斎藤環, 2009, 『心理学化する社会 — 癒したいのは「トラウマ」か「脳」か』河出書房新社. 70-71 頁を参照。
- ⁸ 斎藤によれば、PTSD「心的外傷後ストレス障害(post-traumatic stress disorder)」とはトラウマやストレスにより、その体験に関連することに過敏性なり、類似の体験を回避しようとし、生活上の支障をもつ精神障害を指す。斎藤環, 2009, 『心理学化する社会 — 癒したいのは「トラウマ」か「脳」か』河出書房新社. 63 頁を参照。
- ⁹ 斎藤環, 2009, 『心理学化する社会 — 癒したいのは「トラウマ」か「脳」か』河出書房新社. 60 頁を参照。
- ¹⁰ 中島浩籌, 2000, 「生涯学習・管理社会におけるカウンセリング — 我々はどのように管理されていくのか」日本社会臨床学会編『カウンセリング・幻想と現実①巻理論と社会』現代書館. 162 頁を参照。
- ¹¹ 小池靖, 2007, 『セラピー文化の社会学 — ネットワークビジネス・自己啓発・トラウマ』勁草書房. ii 頁を参照。
- ¹² 島菌進によれば、「精神世界」にあたる現象は欧米では「ニューエイジ」と呼ばれるという。島菌進, 1996, 『精神世界のゆくえ』東京堂出版. 23 頁を参照。
- ¹³ 井上順孝編, 1996, 『新宗教教団・人物事典』弘文社. 92 頁を参照。
- ¹⁴ 島田裕己, 2007, 『日本の 10 大新宗教』幻冬舎新書. 192 頁を参照。
- ¹⁵ GLA 総合出版社編, 2006, 『ようこそ GLA へ — 新しく入会されたあなたへ』GLA 総合本部出版局。
- ¹⁶ Mircea Eliade, 1976, *Occultism, Witchcraft And Cultural Fashions*, The University of Chicago. (= 1978, 楠正弘訳『オカルティズム魔術文化流行』未来社。)によれば、『オックスフォード事典』において、「オカルト」という用語の使用は 1545 年に始まり「悟性や通常の知識の範囲を超えたもの」を意味した。後の 1633 年、オカルトは「古代的、中世的と称された諸科学」の部門を指し、「隠された神秘なる自然の働きに関する知識や利用を含むもの(呪術、錬金術、占星術、神秘学など)」となったという。
- ¹⁷ 島菌進, 1996, 『精神世界のゆくえ — 現代世界と新霊性運動』東京堂出版. ニューエイジとはカウンター・カルチャーの運動を通じて、キリスト教や近代合理主義とも異なる新しい文化原理を希求する運動である。
- ¹⁸ GLA 総合出版社編, 2010, 『GLA 2010.8』GLA 総合本部出版局。
- ¹⁹ 島菌進, 2001, 『ポストモダンの新宗教 — 現代日本の精神状況の底流』東京堂出版. 11-12

-
- 頁を参照。西山茂, 1979, 「新宗教の現況」『歴史公論』5(7), 雄山閣: 33-37. 36 頁を参照。
- ²⁰ 島藺進, 1992, 『新新宗教と宗教ブーム』岩波ブックレット. 7 頁を参照。
- ²¹ 西山茂, 1997, 「コメント『〈新新宗教〉概念の学術的有効性について』へのリプライ」『宗教と社会』3: 25-29 頁を参照。
- ²² 島藺進, 2001, 『ポストモダンの新宗教 — 現代日本の精神状況の底流』東京堂出版. 178-179 頁を参照。
- ²³ 島藺進, 2001, 『ポストモダンの新宗教 — 現代日本の精神状況の底流』東京堂出版. 176-179 頁を参照。
- ²⁴ 島藺進, 2001, 『ポストモダンの新宗教 — 現代日本の精神状況の底流』東京堂出版. 178-179 頁を参照。
- ²⁵ 西山茂, 1988, 「5 現代の宗教運動」大村英昭・西山茂編『現代人の宗教』有斐閣。
- ²⁶ 阿部珠理, 2005, 『アメリカ先住民 — 民族再生にむけて』角川学芸出版社. 240 頁を参照。
- ²⁷ 山崎正和, 1984, 『柔らかな個人主義の誕生 — 消費社会の美学』中央公論社. 77 頁を参照。
- ²⁸ 山崎正和, 1984, 『柔らかな個人主義の誕生 — 消費社会の美学』中央公論社. を参照。
- ²⁹ 吉見俊哉, 2009, 『ポスト戦後社会』岩波書店。
- ³⁰ 山崎正和, 1984, 『柔らかな個人主義の誕生 — 消費社会の美学』中央公論社. 53-54 頁を参照。
- ³¹ Robert N. Bellah, 1985, *Habit of The Heart : Individualism and Commitment in American Life*, University of California Press (=1991, 島藺進・中村圭史訳『心の習慣 — アメリカ個人主義のゆくえ』みすず書房.) を参照。
- ³² Anthony Giddens, 1991, *Modernity and Self-Identity : Self and Society in the Late Modern Age*, Polity Press. (=2005, 秋吉美都訳『モダニティと自己アイデンティティ — 後期近代における自己と社会』ハーベスト社.) を参照。
- ³³ 樫村愛子, 2003, 『「心理学化する社会」の臨床心理学』世織書房. 70 頁を参照。
- ³⁴ 沼田健哉, 1985, 「高橋信次と GLA の研究」『桃山学院大学社会学論集』: 19(2) : 171-194.
- ³⁵ GLA 総合本部出版局編, 2006, 『ようこそ GLA へ — 新しく入会されたあなたへ』GLA 総合本部出版局を参照。
- ³⁶ GLA 総合本部出版局編, 2006, 『ようこそ GLA へ — 新しく入会されたあなたへ』GLA 総合本部出版局を参照。
- ³⁷ GLA 総合本部出版局編, 2006, 『ようこそ GLA へ — 新しく入会されたあなたへ』GLA 総合本部出版局を参照。
- ³⁸ GLA 総合本部出版局編, 2006, 『ようこそ GLA へ — 新しく入会されたあなたへ』GLA 総合本部出版局を参照。
- ³⁹ GLA 総合本部出版局編, 2010, 『GLA 2010.8』GLA 総合本部出版局を参照。
- ⁴⁰ 古代ギリシアの哲学者プラトン『ティマイオス』(1966)「クリティアス」(1978)によればアトランティス大陸とは楽園であり、人々は霊能力を持っていたが洪水により滅亡したと伝えられている。

-
- ⁴¹ 高橋佳子, 1991, 『サイレント・コーリング — 21 世紀衝動』 三宝出版. 268 頁を参照。
- ⁴² 森真一, 2000, 『自己コントロールの檻 — 感情マネジメント社会の現実』 講談社. 221 頁を参照。
- ⁴³ 小沢牧子, 2000, 「カウンセリングの歴史と原理」 日本社会臨床学会編『カウンセリング・幻想と現実 理論と社会』 上巻, 現代書館.
- ⁴⁴ 小沢牧子, 2002, 『「心の専門家」はいらない』 洋泉社. 75-76 頁を参照。
- ⁴⁵ 斎藤環, 2009, 『心理学化する社会 — 癒したいのは「トラウマ」か「脳」か』 河出書房新社. 98 頁を参照。
- ⁴⁶ 渋谷望, 2003, 『魂の労働 — ネオリベリズムの権力論』 青土社. 167 頁を参照。
- ⁴⁷ 森真一, 2000, 『自己コントロールの檻 — 感情マネジメント社会の現実』 講談社. 森は E・デュルケムを参考にして、「人格崇拜(culte de la personne)」について述べる。森によれば、それは個々人が相互に相手の人格に神の聖性があるように敬意を表し、その尊厳を傷つけないよう配慮することであるという。アメリカの社会学者 E・ゴフマンの仮説によれば、現代社会は人格崇拜に基づいて構成され、人々が高度に厳格に人格崇拜すればするほど、心理主義化が進行するという仮説を詳細に記述した。44-45 頁を参照。
- ⁴⁸ 森真一, 2000, 『自己コントロールの檻 — 感情マネジメント社会の現実』 講談社. 222 頁を参照。
- ⁴⁹ Anthony Giddens, 1991, *Modernity and Self-Identity: Self and Society in the Late Modern Age*, Polity Press. (= 2005, 秋吉美都訳『モダニティと自己アイデンティティ — 後期近代における自己と社会』 ハーベスト社.) を参照。
- ⁵⁰ 高橋信次, 1971, 『心の発見神理篇』 三宝出版. 97 頁を参照。
- ⁵¹ 沼田健哉, 1986a, 「現代新宗教におけるカリスマの生と死: 高橋信次と GLA の研究」『桃山学院大学社会学論集』 20(1): 1-33. 9 頁を参照
- ⁵² 沼田健哉, 1986. 参照。
- ⁵³ 沼田健哉, 1986b, 「GLA における教祖とその周辺」『桃山学院大学社会学論集』 20(2): 113-131. を参照。
- ⁵⁴ 高橋佳子, 1991, 『サイレント・コーリング — 21 世紀衝動』 三宝出版. 242 頁を参照。
- ⁵⁵ アーカーシャ年代記〈Akasha Chronik〉について、西川隆範『シュタイナー用語辞典』(2002) 風濤社. によれば、阿迦捨年代記(阿迦捨は虚空の意)といい、精神世界の境界(有形精神と無形精神界の境)にあつて、世界で生じたことすべての痕跡をイメージの形で保管しているものである。— 探求者は物質的な出来事のイメージではなく、アーカーシャ年代記という霊的エッセンスの中に保管されている思考・感情・意志を見る。西川によれば、アーカーシャ年代記は歪んだ形で心魂界に反映され、霊媒はそれを見るという。15 頁を参照。
- ⁵⁶ 高橋信次, 1971, 『心の発見神理篇』 三宝出版. 224 頁を参照。
- ⁵⁷ 高橋佳子, 2010, 『魂の冒険 — 答えはすべて自分の中にある』 三宝出版. 33-44 頁を参照。
- ⁵⁸ 島菌進, 2001, 『ポストモダンの新宗教 — 現代日本の精神状況の底流』 東京堂出版. 43-47 頁を参照。
- ⁵⁹ クレンショー・ジェームズ, 1992, 西村一郎訳『アガシャの霊界通信上』 正法出版. 4 頁

を参照。

- ⁶⁰ 園頭広周, 1988, 『二十一世紀まで生き延びれるか』 正法出版社. 60 頁を参照。
- ⁶¹ 芳賀学, 1994, 『祈るふれあう感じる』 IPC. 80-83 頁を参照。
- ⁶² 島藺進, 2001, 『ポストモダンの新宗教』 の 58-59 頁を参照。
- ⁶³ 高橋信次, 1971, 『心の発見 — 科学篇』 三宝出版. 105-107 頁を参照。
- ⁶⁴ 高橋信次, 1971, 『心の発見 — 科学篇』 三宝出版. 225-229 頁を参照。
- ⁶⁵ 島藺進, 2001, 『ポストモダンの新宗教』 の 59 頁を参照。
- ⁶⁶ 渋谷望, 2003, 『魂の労働 — ネオリベラリズムの権力論』 青土社. 167-168 頁を参照。
- ⁶⁷ 渋谷望, 2003, 『魂の労働 — ネオリベラリズムの権力論』 青土社. 167-168 頁を参照。
- ⁶⁸ 島藺進, 1992, 『新新宗教と宗教ブーム 岩波ブックレットNo.237』 岩波書店. 31-32 頁を参照。
- ⁶⁹ 大川隆法, 1988, 『幸福になれない症候群』 土屋書店. 21-22 頁を参照。
- ⁷⁰ 島藺進, 1992, 『新新宗教と宗教ブーム 岩波ブックレットNo.237』 岩波書店. 31-32 頁を参照。
- ⁷¹ 島藺進, 1992, 『新新宗教と宗教ブーム 岩波ブックレットNo.237』 岩波書店. 31-32 頁を参照。
- ⁷² Robert N. Bellah, 1985, *Habit of The Heart: Individualism and Commitment in American Life*, University of California Press (=1991, 島藺進・中村圭史訳 『心の習慣 — アメリカ個人主義のゆくえ』 みすず書房.) を参照。
- ⁷³ 渋谷望, 2003, 『魂の労働 — ネオリベラリズムの権力論』 青土社. 167-168 頁を参照。

The “Psychologized” Doctrines of a Neo New Religion : The Case of God Light Association.

Noriko Watanabe
Graduate School of Sociology, Rikkyo University

Keiko TAKAHASHI, the present leader of God Light Association (GLA), one of the Japanese neo new religious movements from the 1970's, is called as “Mikhail” by members, and she offers terminal care for members, which is a kind of spiritual counseling.

We can observe from GLA activities a desire for “the technique of the heart” by the people in the service industry doing emotional labor, and they are forced to compete in individualized and globalized society.

By analyzing the technique of the heart, it is argued that the old modern self was just a passive actor who behaves in response to external stimulation, and that today's self should actively control his or her own behavior with the emphasis on self-responsibility.

Also, from the view point of GLA's God image, channeling by the founder Shinzi TAKAHASHI and his disciples, and Zen meditation, doctrines of neo new religions in the late capitalism are fairly “psychologized”.

Keywords: The technique of the heart, Neo New religious movements, Counseling, Self-responsibility, Master of psychology justification.